2010.2.6

補綴史研究所の設立を望む

転換期における歴史の重要性

永田和弘

はじめに

早いもので、歯科医学史の講義を始めて広島大学が 24 年、東北大学で 20 年が経過した。共に咬合論・咬合器の歴史を中心としたもので、一見地味な分野である。しかし、入ってみると実に面白く興味が尽きないのである。しかも、現実の臨床に役立つとなれば、私が夢中になるのも分かっていただけよう。

今回は、きっとこの知的興奮は皆様の好奇心を奮い立たせるであろうと思われるので、私自身が興味を抱いた最初のきっかけを紹介したいと思う。そして、実利的な部分でだけではなく、「そうであったか」と思っていただきたいし、それが今後の歯科学発展につながり、現在の歯科学が置かれた状況の打開に役立つと思われるからである。

1．歴史は思ったよりも掴み辛い

学問の転換期においてはいつも歴史が見直される。立たされた現在を如何に知るかは、経(た)ち来たった道のりを通してでないと分からないからである。単なる骨董趣味でもなければ、教養・素養の一端でもない、現在を知る手段としての歴史がある。この新しい歴史を研究し、この新しい歴史から学ぶ必要がある。問題はどのように歴史に接するかである。

今となっては古い映画となったが、「インディ・ジョーンズ　最後の聖戦」の中でジョーンズ先生が学生に講義をするシーンがある。「諸君、重要なのは Fact(事実) であって、Truth(真実) ではない。」何気ない一言ではあるが、このシナリオライターは只者ではないと思った。というのも、歴史的事実が実は簡単な事柄ではないからである。

「歴史的事実は小石のように既にあるものとして、転がっているのではない。事実が事実となるためには、人間行為の手が加わっている」　（トインビー）

「事実は訪ねて行ったとき、初めて口を開いてくれるのである。どの事実に発言権を与え、どのような脈絡をつけるかは歴史家の仕事である。」　（カー）

これらの現代歴史観は 19 世紀の「本当は過去は如何であったか」(ランケ) への反省から生まれた。

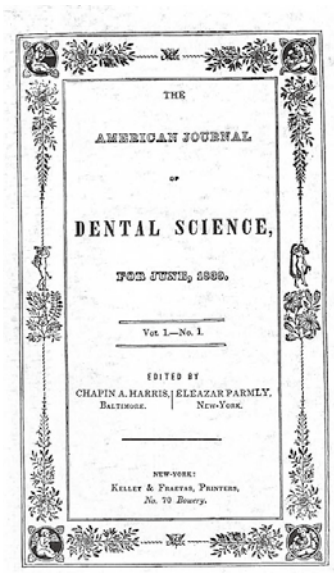
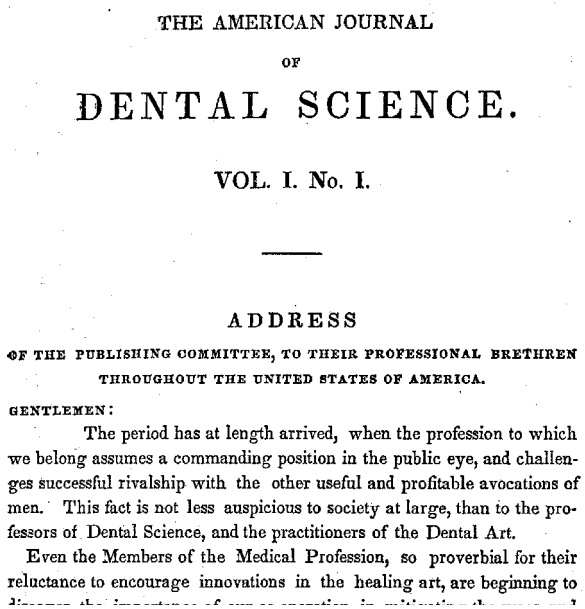

THE
AMERICAN JOURNAL
OF
DENTAL SCIENCE,
FOR JUNE, 1839.
Vol. 1.—No. 1.
EDITED BY
CHAPIN A. HARRIS, Baltimore. | ELEAZAR PARMLY, New-York.
NEW-YORK:
Kelley & Fraser, Printers,
No. 79 Bowery.

図 1


THE AMERICAN JOURNAL
OF
DENTAL SCIENCE.
VOL. I. No. I.

ADDRESS
OF THE PUBLISHING COMMITTEE, TO THEIR PROFESSIONAL BRETHREN THROUGHOUT THE UNITED STATES OF AMERICA.

GENTLEMEN:

The period has at length arrived, when the profession to which we belong assumes a commanding position in the public eye, and challenges successful rivalship with the other useful and profitable avocations of men. This fact is not less auspicious to society at large, than to the professors of Dental Science, and the practitioners of the Dental Art.

Even the Members of the Medical Profession, so proverbial for their reluctance to encourage innovations in the healing art, are beginning to

図 2

American Journal of Dental Science 創刊号とその最初のページ

歯学史、特に補綴史においてはこの「本当の過去」が問題であった。　私の場合は、「歴史」を学ぶことによって、先ず「疑う」ことを学んだ。ここからが出発だったのである。
今回は例証の一つとして「最初期の咬合器」の追求を示してみよう。

2. 歴史を始めるには資料が必要

この日本において、アメリカで誕生した歯科医学の歴史を研究することは容易ではない。研究するにも、資料そのものが無いのである。補綴史を研究する上で、最初の仕事は古書の単行本・学術雑誌の収集であろうが、これは個人の仕事のレベルではない。できることからしかできない。多数の古書の中から補綴史基本文献として必要なものをピックアップすることから始めたが、これ自体が大きな作業であった。

私の収集は限られたものであったが、少しずつ進めていった。医歯薬出版の古書部には大変お世話になった。私の収入のほとんどが古書に回されたが 20 年も続けると、限られたものとはいえ 1800 年代と 1950 年頃までの主たる補綴学の教科書や学術雑誌は手元に揃うようになった。

学術雑誌の主なものは、Dental Cosmos 誌，JADA 誌，Dental Items of Interests 誌，JPD 誌の各誌が創刊号より揃っている。歯科学最初の学術誌である The American Journal of Dental Sience は多くの欠号あるも third series まで所蔵できた。創刊号（1839 年）は所蔵している。（図 1）

孫引きや紹介記事で知る情報は誤りを含む危険性があり、断片的な切抜きは全体を投影していないことが多い。小さな記事にせよ、雑誌全体から直接見るに越したことはない。その記事の時代背景が読み取れるからである。

1840 年にアメリカのバルチモアに世界で最初の歯科学校（BOLTIMORE COLLEGE OF DENTAL SURGERY）が設立された。（図 3）　そのときの教科書 Principle and Practice of Dentistry(1839) は版を重ねて 13 版（1902）に至っている。この本の改訂版の推移がアメリカの歯科学の状況を示している。全ての版を所蔵しているわけではないが、このグループは私の蔵書の基本中の基本である。（図 4）

図 3
Baltimore College of Dental Surgery
1840
最初の入学者数は 5 名であった。

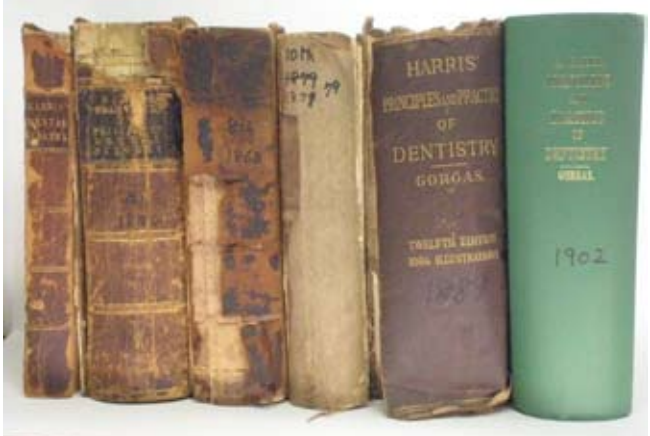


図 4　The Principles and Practice of Dentistry
名称を変えながら 13 版（1902）に至る。 写真左から
1 番目：The Dental Art, A Practical Treatise on Dental Surgery. (1stEd.1839)
2 番 目：The Principles and Practice of Dental Surgery　(4th Ed. 1850)
3 番目：同（8th Ed. 1863）
4 番目：The Principles and Practice of Dentistry (10th Ed. 1879)
5 番目：同（12th Ed. 1889）
6 番目：同（13th Ed. 1902）

3. 最初期の咬合器

従来より、Gariot が最初の金属性咬合器を創始 (1805) したと言われ、図 7 のタイプの平線咬合器が紹介されてきた。しかし、The Principles and Practice of Dentistry には Gariot の咬合器は載っておらず、石膏咬合器が主として取り扱われ、金属製は Evans のものが紹介されている。(図 5)

おそらく、当時の教科書の 1 ページを実際に見たときの私の興奮を、読者の方々も感じられるに違いない。これは珍奇への興味ではない。土台としての過去への現代からの理解に疑問を感じたからである。「事実は本当は如何であったか」という関心が生じたからである。

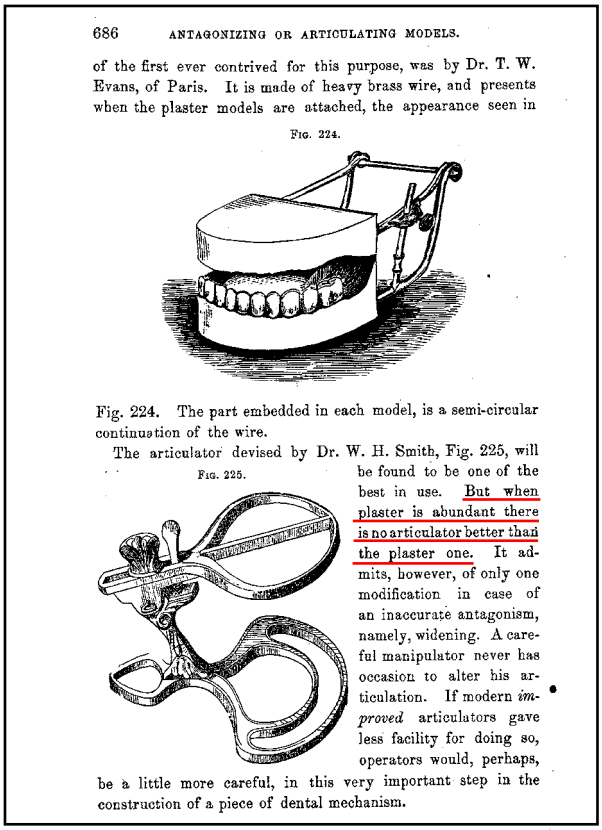
1800 年代はその 100 年を通して、実は石膏咬合器の時代であった。Bonwill 咬合器 (1858) や、S.S.White 社からは今日お馴染みの金属製平線咬合器 (1866) が出たが、Principle and Practice は第 13 版 (1902) に至っても Old-fashon の石膏咬合器を推奨したいと紹介している。中心咬合位の規定能

図 5 The Principles and Practice of Dental Surgery 第 4 版 (1850) と咬合器に関する部分

右ページは Evans 咬合器で教科書に登場した最初の金属製咬合器。

図 6 Denton が紹介した石膏咬合器

Gariot の著作には解説文だけで、石膏咬合器の図はない。この図は Denton が Gariot の解説に従って忠実に製作した石膏咬合器である。



686 ANTAGONIZING OR ARTICULATING MODELS.

of the first ever contrived for this purpose, was by Dr. T. W. Evans, of Paris. It is made of heavy brass wire, and presents when the plaster models are attached, the appearance seen in

FIG. 224.

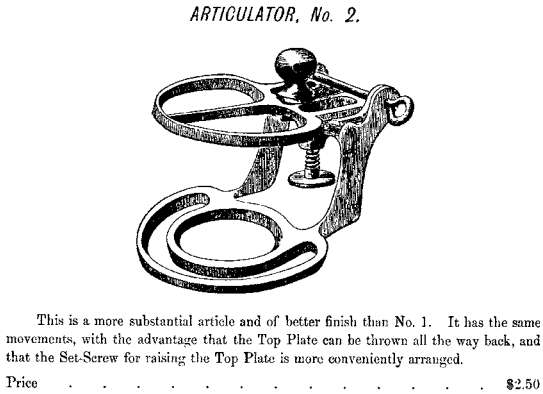
Fig. 224. The part embedded in each model, is a semi-circular continuation of the wire.

The articulator devised by Dr. W. H. Smith, Fig. 225, will be found to be one of the best in use. But when plaster is abundant there is no articulator better than the plaster one. It admits, however, of only one modification in case of an inaccurate antagonism, namely, widening. A careful manipulator never has occasion to alter his articulation. If modern *improved* articulators gave less facility for doing so, operators would, perhaps, be a little more careful, in this very important step in the construction of a piece of dental mechanism.

FIG. 225.

図7 The Principles and Practice(第 8 版 : 1863)

上は Evans 咬合器 (1850)、下は S.S.White #1(1855)



ARTICULATOR, No. 2.

This is a more substantial article and of better finish than No. 1. It has the same movements, with the advantage that the Top Plate can be thrown all the way back, and that the Set-Screw for raising the Top Plate is more conveniently arranged.

Price $2.50

図 8 S.S.White の平線咬合器 (#2):1866

最初の金属性咬合器として紹介されるが、時代は新しい。

の確かさを評価してのことであった。

さて、石膏咬合器であるが、1933 年に Denton, G.B. は Dental Cosmos 誌で「The Gariot articulator myth. 」と題して、「Gariot の著作には、石膏咬合器 (図 6) の製作法を記述しただけで、金属性咬合器については述べていない」と当時の金属製咬合器創始の通説に批判を加えた。

Gariot が金属製咬合器の創始者ではなく、石膏咬合器の製作法を記述しただけであるとしても Gariot の意義は少しも下がることはない。上下顎の位置関係を規定し、口腔外にそれらを再現することの意義はきわめて大きいからである。

また、現代のわれわれは石膏咬合器を金属性咬合器よりも劣ったイメージで捉えるが、石膏咬合器の位置規定は確実であり、平線咬合器 (蝶番咬合器　図 8) は咬合位を調節できるというもののヒンジ部のガタぶれによって咬合を曖昧にしているとして厳しく糾弾している。(図 7)

中心咬合位の規定能は、咬合器の機能の中で一番重要なものである。　図 9 は 1800 年代後期の平線咬合器である。一見したところは普通の平線咬合器に見えるが、ヒンジ固定部分がネジ込み式になっていて、タイトに締めると絶対にガタぶれを許さない堅固なヒンジ運動をする。

ヒンジ運動しかできない咬合器はレベルが低いと考えがちであるが、咬合器に要求される機能として一番重要な「堅固なヒンジ運動」が確実に実現されているこの咬合器の理念には脱帽するところがある。

早速この機構を私が開発した全調節性咬合器 BGN 咬合器に取り込んだ 。(図 10)

理系においては誤謬が正されて新規に至る側面が強いために、捨て去られた過去を洗い出す作業は低く見られるがそうではない。今回は「最初期の咬合器」で歴史を振り返ったが、「過去の事実」を洗い出すと仰天ものがいっぱい出てくる。歴史を踏まえて前進しなくてはならない。

4. 先人の情熱と現代我々の使命

1839 年の American Journal of Dental Science 創刊号は S.Brown の「ようやくにして、時節の到来であります」で始まっている。(図 2)　その直前には H.Hayden が Maryland 大学で歯科学の講義をして、医学部の中に歯科学を置こうと努力したが叶わなかったいきさつがある。この巻頭言にはやっと歯学は医学と並ぶ所に到達したという喜びにあふれている。最初の学術誌、最初の学校、最初の組織を達成した当時の情熱は資料の中から十分に窺い知ることができる。

おわりに

私の歯科医師人生の中でも自分の職業に対する感慨は紆余曲折を経てきた。人生の終盤に来て、感じることは歯科の世界はやはり素晴らしい世界であるということである。歯科学は全ての人々の健康に直結し、全ての学問と直結している。単に歯を抜く、削る、詰める、補綴するだけのものではない。

図9　1800 年代の平線咬合器

図 10　BGN 咬合器に取り込んだ円錐シャフト (矢印)

この機構により厳密なヒンジ運動が可能となった。

虫歯なり欠損するなりの背後にはそれに至る背景があり、それは患者さん一人一で異なるものである。歯科治療は科学の俎上には載せられない人間的な行為でもある。勿論、客観的な科学技術としての治療体系が必要ではあるが、あったとしても紋切り型の処置を施せばよいと言ったものではない。インフォームド・コンセントやクリティカル・パスが本来の患者のためという内実を失い医療の自己防衛や利益追求スキルと形骸化しそうな昨今において、先人が後世に託した悲願を我々はしっかりと受け止めねばならない。無しでも十分に間に合う過去の遺物としてではなく、本来医療とは何であったかを反省するとき、不可欠な基準点としての過去を手元に置く必要がある。

個人の開業医が「補綴史研究所を設立したい」という想いから、今から思えば常軌を逸した狂気とでもいうべき古書群が出来上がっている。（図 11）　何とかならないものだろうか。

終わり

図１１　収集された古書群